

ヴォルフガング・ミヒエル 著

『ライプツィヒから日本へ』

本書は、カスバル流外科の開祖といわれるカスバル・シヤ

ムパーガー(日常会話ではシャムパーガーだが、改まって書くときはシャムベルゲルで、本書では常にそう書いてある)の伝記である。しかし日本では一六四九年彼が江戸に滞在した一〇ヶ月間と、次に使節団に同行して江戸に来た時のことしかわかっていない。彼の幼少年期のことや、一六五〇年代半ばに帰国してからの後半生のことは、本書で初めて明らかにされたといえる。彼が少年期の頃、外科医の免状交付をめぐって床屋と風呂屋が競い合っていた。彼は理髪外科医の道を選び、免許取得後は北ドイツ、デンマーク、スウェーデンを廻って修行し、ついにアムステルダムで東ドイツ会社に職を得た。彼は大変な困難を乗り越えてパタビアへ着いた。社命で東インド諸国を巡ったのち一六四九年に日本に赴任した。

シャムパーガーが初めて江戸へ来た時、將軍家光は病床にあった。シャムパーガーは西洋の技術や医学に関心を持つ大目付井上筑後守政重に注目され、使節団が長崎へ引き上げた後も幕府の要請で一〇ヶ月も江戸にとどまり、幕府高官の治療や、持参した薬品の説明にあたった。その他彼の活動については、通詞猪俣伝兵衛が幕府の指示を受けて報告書をまとめており、その写本がカスバル流外科の台本となった。カスバル流外科の伝播については、河口良庵が大きな役割を果たしたことを本書は伝えている。

一〇年余り東アジアで活躍したシャムパーガーは一六五〇年代半ば頃、ヨーロッパへの帰郷を決心した。彼は生地ライプツィヒへ帰り、外科医をやめて、よりよい収入と名声を得

られる商人という職を得た。市民社会への社会復帰は成功した。彼はある商人の未亡人と結婚するが、彼女が数年後に亡くなったあと、市の参事会員の娘と結婚した。彼の社会的地位が向上したことがわかる。

その後生まれた長男は医学部教授になり、後には学長となった。その頃シャムパーガー家の邸は市の面積の三分の一におよび、富と繁栄を表している。彼は、異例の長寿を全うして一七〇六年し死去した。一家は短期間に高い地位に上りつめたが、落ちるのも早かった。教授になった子が五十代で死に、孫達も早逝して、娘達は他の地域へ嫁いだため、シャムパーガー一家の名前は十八世紀半ば頃には市民台帳から消えた。

著者がシャムパーガーについて初めて発表したのは、第八〇回日本医史学会(熊本、著者が会長)であったが、そのときシャムパーガーがオランダ人ではなくドイツ人であること、その戸籍がライプツィヒにあることを聞いた。それから短期間にライプツィヒやオランダを訪れ、多数の資料を発見・収集し、カスバル流外科のいきさつが明らかになった。残念ながら本書はOAGの出版であるため(筆者も会員)難解なドイツ語である。速やかに和訳が出ることが望ましい。

(鹿子木 敏範)

[OAG: Hans: 千一〇七-〇〇五二 東京都港区赤坂七-五-五六、電話〇三-三三三八-二七七四三、一九九九年、A5判、三〇四頁]